

「武蔵国造の乱」はあったか

－ 6世紀前半以降の上野・武蔵地域の政治勢力の所在－

利 根 川 章 彦

1 はじめに

『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月是月条に、笠原直使主と同族小杵が武蔵国造の地位を争ったことが記されている。小杵は上毛野君小熊を頼んで使主を殺そうとしたので、使主は都に逃げて朝廷に訴えた。朝廷は使主を国造とし、小杵を殺した。使主はその返礼として、横渟・橘花・多氷・倉櫛の四か所の屯倉を献上した、とされている。この年の干支は甲寅で、西暦 534年にあたる。この伝承は「武蔵国造の乱」あるいは「叛乱」として有名である（以下、必要のない限り、この伝承については「武蔵国造の乱」と記述する）。

戦前の考古学・歴史学では、神話・伝承と古墳を結びつけて考える傾向が顕著であり、全国的に見ても、古代の天皇・皇族あるいは神話に登場する神（人物？）を各地の古墳の被葬者に想定しようとする論著が多数見受けられた。ここから、自然のなりゆきとして「埼玉古墳群の被葬者＝武蔵国造一族」という考え方の図式ができあがり、1950～70年代においても埼玉古墳群と「武蔵国造の乱」を関連性の深いものとして考える説が考古学者から提示されることにつながった。その後の沈静化を経て、つい最近また、尾野善裕氏から、稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣の「辛亥年」を西暦 531年に比定することにより、この考え方を再評価しようとする説が提示されている（註1）。

はたして、学問の現段階から考えて、『日本書紀』安閑紀の記事と実際の古墳群形成を直接的に関連するものとして考えることができるものであろうか。

本稿では、埼玉古墳群内の発掘調査によって知られるようになった土器類を中心とした出土資料および東京・埼玉・群馬の大型古墳の編年についての最近の研究動向から、『日本書紀』安閑紀に相当する時期、すなわち6世紀前半以降の政治勢力のありようについて考えてみようと思う。この問題については本来『日本書紀』安閑紀の読み方と組み合わせるべきであるが、紙数に余裕がないので、今回はできるだけ考古学的検討に焦点を絞ることとしたい。

2 埼玉古墳群と「武蔵国造の乱」に関する研究抄史

まず、本論に入る前に、過去の考古学研究の中で、埼玉古墳群や「武蔵国造の乱」がどのように取り扱われてきたか、簡単に記述しておく。ただし、この研究史整理は、すでに清水久男氏による詳細な論文が発表されているので（註2）、必要な範囲で記述するにとどめる。

かつて、甘粕健氏は、和島誠一氏と共著の『横浜市史』での論述、和島氏の『岩波講座日本歴史』掲載論文等の一連の業績（註3）を踏まえて、埼玉古墳群の成立時期に東京の多摩川下流域の有力古墳が衰退する現象から、南武蔵と北武蔵の政治勢力の交替が考えられるとし、この事件を反映するものとしてと考えた（註4）。大塚初重氏（註5）もこの説と同様の見解をとっている。これに

よって埼玉古墳群が武蔵国造笠原直の一族の歴代の奥津城であるという過去の想定が考古学的にも裏付けられるとする考え方が定着したと言える。その後、金井塚良一氏は、東松山市周辺の大型古墳の築造の動向と埼玉古墳群の成立を比較検討することによって、この事件の舞台を北武蔵内部と考え、比企地域と行田市周辺地域の政治勢力の争いであるとし、甘粕説を批判した（註6）。この1960～70年代の議論ののち、稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣に雄略天皇と考えることができる「獲加多支鹵大王」と考えられる人名が記述されていたことが判明した。それ以後「武蔵国造の乱」を中心とした議論が後退する傾向が見られるようになった。

比較的最近になって、滝沢規朗氏がまとめた南北武蔵の大型古墳の築造動向からみた首長権力の変化に関する論文において、多摩川台古墳群の最近の調査成果による古墳時代後期の首長墓級前方後円墳の存在を位置付けようという考え方が示され（註7）、坂本和俊氏によって埼玉古墳群内に「武蔵国造笠原直使主」も「同族小杵」も葬られている想定がなされて（註8）、「武蔵国造の乱」と埼玉古墳群の関係についての考え方にも若干の変化が見受けられるようになった。

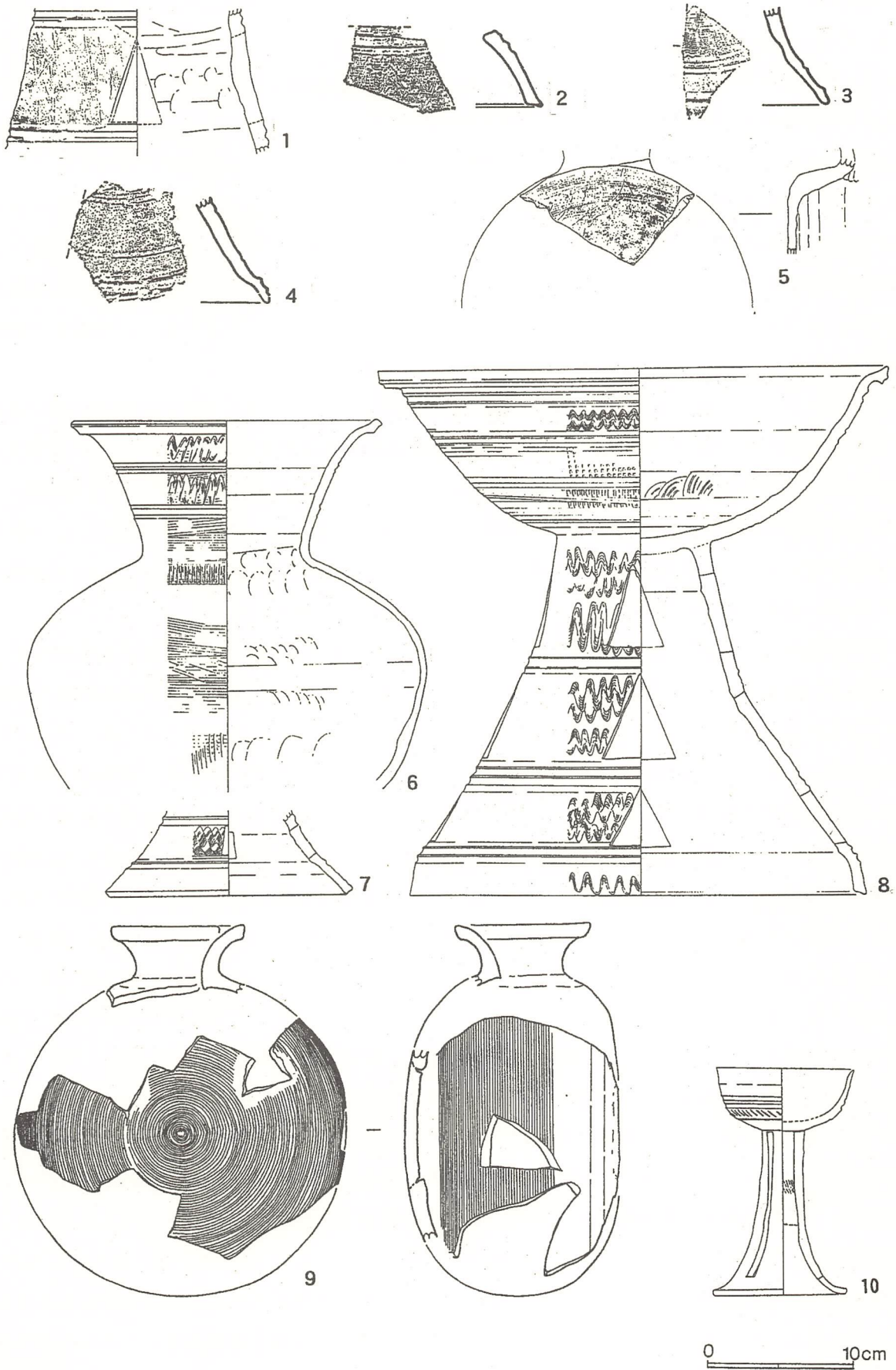
1990年代になって、日本列島全域の前方後円墳の調査研究を集大成した『前方後円墳集成』（以下『集成』と省略する）が刊行され、地域別の前方後円墳研究会も徐々に結成・活動開始という状況が生まれてきた。埼玉・東京・群馬でも古墳の規模や年代が最近の調査により変更されている場合もあるようなので、『集成』刊行時期以後の各地の古墳の検討を参考にして、現段階の見解に基づき「武蔵国造の乱」の時期の大型古墳の推移を考え直すことが必要となっている。

3 出土土器等から見た6世紀前半以降の埼玉古墳群

本章では、埼玉古墳群内の各大型古墳から出土した土器を中心とした遺物群の分析を手がかりに、埼玉古墳群中の大型古墳で6世紀前半以後に築造されたものの年代と築造順序を推定してみたい。土器を主に取り上げて古墳の年代を考える理由は、第一に、ほとんどの大型古墳で墳丘ないし周堀内で土師器・須恵器が出土しているため、古墳群中の古墳の相対年代を考える「ものさし」にするのに土器類が最も適切な資料であること、第二に、遺物の編年細分を試みた場合に、おそらく最も年代幅の小さい、言い換えれば、古墳の前後関係を確実に捉えることができるものは土器であろう、ということである。

稲荷山古墳については本誌前号で検討したが（註9）、TK47型式（古）段階併行期・猿投窯H-11型式期の須恵器群が出土している。年代としては、西暦500年前後を考慮すべきであろうが、古墳に3つ埋葬施設が構築されたと仮定する限り、古墳の年代の上限は470年頃と想定できる。

これに次ぐ時期の資料としては二子山古墳の資料（註10）があるが、ごくわずかな量の破片しかない。主に造出し付近で採集されたものである。壺・甕・高坏形器台・提瓶がある。高坏形器台は脚部片で、振幅が大きくピッチの短い櫛描波状文・三角形の透孔が特徴である。作りが丁寧であり、瓦塚古墳の器台よりもやや古い段階のものであろう。提瓶は体部の片側を平らに作り、直角に近い形態の肩をもつ。提瓶としては最も古い段階に属するもので、MT15型式段階とすることは許されよう。壺・甕も口縁部の作りがシャープで、頸部の沈線も鋭い。確実ではないが、MT15型式段階を中心として、それ以前のものも含むかもしれない。6世紀初頭前後以降の段階と考えておきたい。



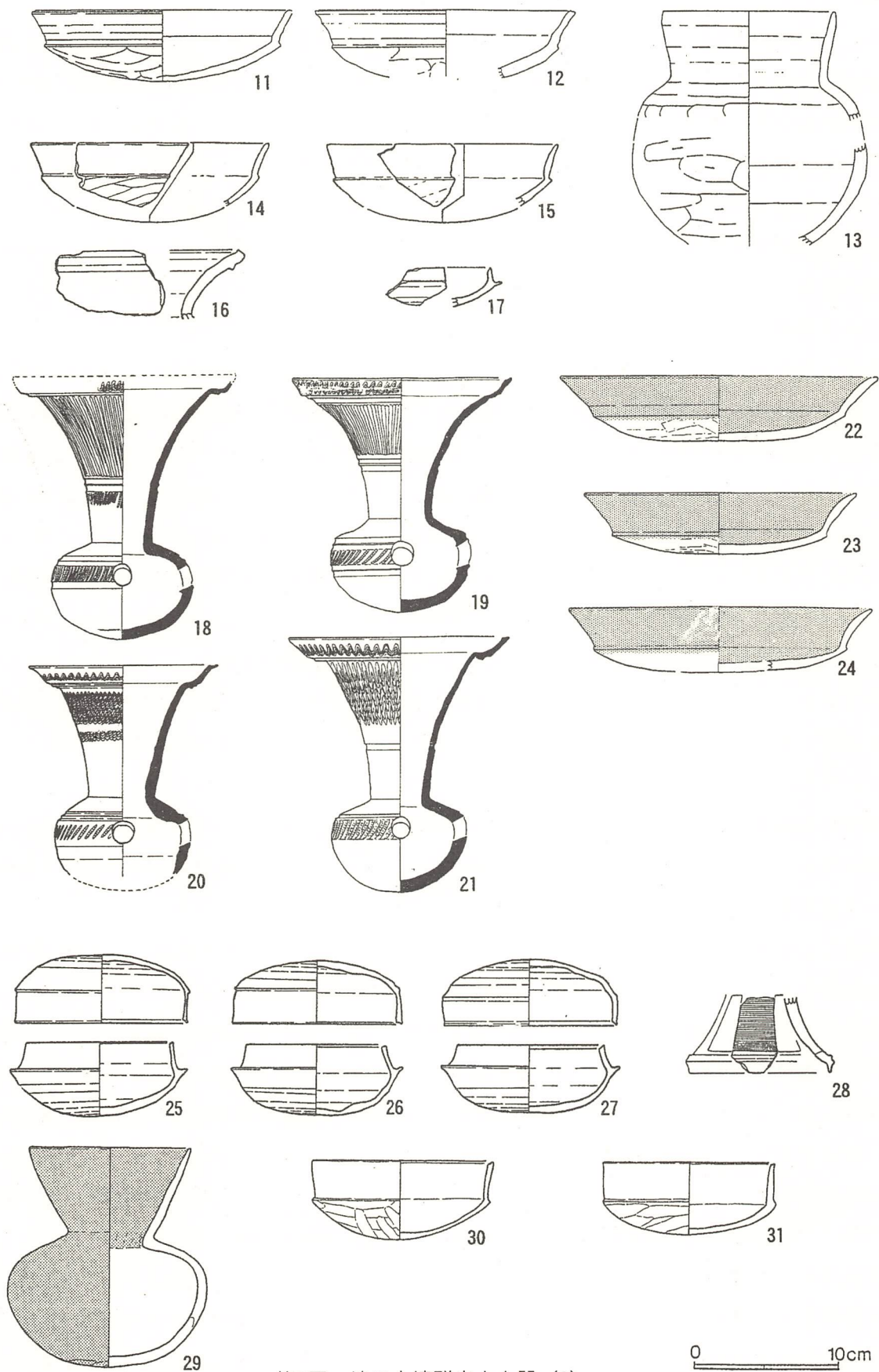
第1図 埼玉古墳群出土土器 (1)
 1~5 二子山古墳 6~10 瓦塚古墳

現在考えられている後続する時期の資料は瓦塚古墳の出土品であるが、丸墓山古墳出土土器（註11）について若干触れておこう。1点だけ、土師器坏の破片があるが、墳丘の出土品でなく、榛名山二ツ岳火山灰Hr-F Aと考えられる火山灰が含まれている墳丘下の旧地表面の下層からの出土であるため今回の図示から省いたが、口径13.6cmという大振りの器で、いわゆる「須恵器模倣坏」の最古段階によく出土する口縁部の立ち上がりが内湾気味になり、口唇部内面に沈線を持つものである。陶邑編年TK23~47型式期に相当するものであろう。Hr-F Aの降下年代の参考資料にはなるであろうが、丸墓山古墳が稲荷山古墳・二子山古墳より新しい時期になりそうだ、という程度の情報にはなっても、丸墓山古墳が6世紀のどの辺の時期まで下るのか、ここからは決定できない。6世紀第1四半期あるいは第2四半期とする説もあるが、それより新しい時期まで埋葬を継続しているとも見ることが出来る。このことについては後述する。

次に最も多くの須恵器を出土した瓦塚古墳（註12）を考えてみよう。すでに詳細な検討をはたしている若松良一氏の論文（註13）によれば、須恵器は高坏型器台2点、無蓋高坏1点、提瓶1点、横瓶1点、脚付壺1点、小型及び中型甕（壺？）6点、大型甕3点、土師器は坏3点、長胴甕1点、埴1点が確認されている。このうち、中型壺と高坏型器台は組合せとして使用されたことが想定できるものである。若松氏はこれらの一群をMT15型式（新）段階とした。しかし、この土器群のすべてが同一時期になるかどうかについては疑問があるので、器種別に検討する。

高坏型器台は、脚部に大きな三角形の透孔が3段透しに開く器形に復元されているであるが、口縁部直下の波状文は1段で、坏部もやや浅くなりつつある器形で、透孔は4段になる可能性が残されている。他の部位も含めると古い特徴を多く持つため、これをMT15型式と考えることは正しいと思う。しかし、問題は提瓶である。頸部直下が欠失しているため、つまみの形態が不明であるが、断面ナデ肩の胴部になっており、TK10型式以降になるものである。無蓋高坏も坏部下部に櫛歯刺突文があり、坏部形態自体も半球形風に作られるのは新しい特徴である。これもTK10型式併行期に下るものであろう。土師器坏は、「小針型」あるいは「埼玉型」と呼ばれる地域性の強い土器であるが、埼玉古墳群内では、6世紀前半段階にはまだ出現していないようである（後述）。埴とされている土器も短頸壺の一種と考えうるもので、坏と同じように新しい時期の所産であろう。したがって、瓦塚古墳の土器群は一時期のものとは考えられず、2~3時期に分けることができる。最も古い時期がMT15型式（新）段階の高坏型器台と中型壺等のやや大型の土器群、次にTK10型式段階の無蓋高坏や提瓶、やや遅れて6世紀後半段階の土師器坏・短頸壺等となる。

これに後続する資料は、常識的には鉄砲山古墳の土器群（註14）であるはずだが、発掘区が狭く、供献土器が置かれやすい造出し付近をはずれた場所であるため、わずかな破片しかない。時期確定の困難な須恵器大型甕の破片を除外すると、図示した須恵器坏片1点、甕片1点、土師器坏片2点に限られる。無理を承知で検討する。須恵器坏は立ち上がりが低く、器高もあまり高くないもので、TK43~209型式に相当しそうなものである。また、土師器坏は2点とも口径の復元があまりあてにならない口縁部破片であるが、図よりももう少し開き、口縁部が寝る器形と考えられそうなものである。これも6世紀末~7世紀初頭あたりの年代になりそうなものである。これを土器供献時期の一段階と考えるならば、隣接する中の山古墳との関係を考慮して、鉄砲山古墳への埋葬年代の



第2図 埼玉古墳群出土土器 (2)

11~13 瓦塚古墳 14~17 鉄砲山古墳 18~24 将軍山古墳
25~31 埼玉2号墳 (梅塚古墳)

下限に近い時期と考えられるだろう。

次に、將軍山古墳の土器群（註15）を扱う。東京国立博物館に所蔵されている、横穴式石室内出土の須恵器無蓋高坏はTK 209型式併行期まで下る可能性のあるものであり、追葬期の遺物として考えられるので、今回は取り上げない。平成4～7年度の周堀の調査で、須恵器は甗4点以上、高坏3点以上、提瓶1点、有蓋長頸壺（台付？）1点、台付長頸壺1点、広口壺3点、甕4点、土師器は坏3点以上の出土が確認された。大部分が造出し付近で出土しているという。このうち、須恵器甗は4点とも造出しと前方部墳丘の間の狭い場所からまとまって出土しているため、同時の供献土器と考えられる。また、土師器坏もほぼ同じ器形なので同時期のまとまりと考えられる。ここではこの2器種について取り上げておく。

まず、甗であるが、4点とも頸部が最大規模に延びる段階に属し、TK43型式あるいはその直前段階、つまりMT85型式あたりになると考えられる。ちなみに、將軍山古墳発掘調査報告書の岡本健一氏の分析はTK43型式説をとっている（註16）。これらのもう一つの特徴は、口縁部を幅狭く作ることである。中村浩氏の大阪陶器編年第Ⅱ型式第5段階（田辺編年TK43型式併行期）の土器群（註17）には数種類の甗が図示されているが、ここでは口縁部幅広の甗の方が主体となっている。口縁部幅狭の形態は第Ⅰ型式の後半段階からあり、特に頸部が延びて口縁部幅狭になるのはTK10型式から普遍的となるようである。將軍山古墳の甗は、頸部上半に櫛描波状文が施されるものと集合沈線文が施されるものがあるが、長頸で口縁部幅狭の形態で、口縁部にも波状文が施されている。古い特徴を多く残しながら長頸化する形態から考えるならば、TK43型式（第Ⅱ型式第5段階）に下る可能性を残しながらも、それよりは古い段階と考えることが可能である。したがって、MT85～TK43型式のあたり、6世紀後半でも古い段階と考えたい。

次に、土師器坏であるが、いずれもたいへん口径が大きく、扁平化している器形であり、口縁部外面と内面全体が赤彩される特徴から考えるならば、「比企型坏」のやや新しい段階の一類型として、7世紀初頭以降に下降する時期のものであると考えた方がよさそうである。

ゆえに、將軍山古墳の土器群にも、MT85型式段階に遡りそうな須恵器甗から7世紀初頭段階の土師器坏まで、3段階程度の時間幅があることがわかる。

最後に、稲荷山古墳の南に所在していた小古墳群のうち、まとまった土器類を出土した埼玉2号墳（梅塚古墳）の資料（註18）に触れておきたい。この古墳には須恵器の蓋坏が3セット6点、土師器坏2点、土師器埴1点の合計9点は完形になるもので、もう1点須恵器有蓋高坏の脚部片がある。須恵器蓋坏はTK47型式段階の範疇になりそうであるが、稲荷山古墳と比較するとわずかに新しいと思われる。土師器坏も完全な「須恵器模倣坏」になっており、より過渡的な半球形の形態に近い坏を含む稲荷山の土師器群よりわずかに新しい。埴の形態も口径が胴部径より小さくなり、和泉式後半から鬼高式初期にかけての形態となっている。西暦500年を少し過ぎたころの年代とすることができよう。小古墳の中では埼玉3・4・6・7号墳からも「模倣坏」の出土が知られる。3・4号墳の坏は2号墳例と近似する形態を示すが、6・7号墳例は口縁部がわずかに外反気味に立ち上がる特徴が見受けられる。2号墳よりさらに下降する時期、すなわち6世紀前半代と考えてよからう。小古墳中では5号墳のみに「小針型坏」または「埼玉型坏」と呼ばれる土器がある。小古墳

群の大半がおおむね6世紀前半代に築造されていたと考えてよければ、埼玉古墳群内では「小針型杯」は6世紀前半代には一般化していなかったか、まだ出現していなかったと考えることができる。この点を、瓦塚古墳出土の「小針型杯」を6世紀後半に下降させる傍証としておきたい。

以上の土器の分析からは、稲荷山古墳以後の古墳築造順序・年代は、愛宕山古墳が丸墓山古墳とほぼ同時期、奥の山古墳が瓦塚古墳とほぼ同時期と考えられそうなので、二子山(墳長138m) [6世紀初頭前後] →丸墓山(径105m) [6世紀第1四半期以降] ・愛宕山(墳長53m) [6世紀前半] →瓦塚(墳長73m) [6世紀第2四半期～第3四半期] ・奥の山(墳長69m) [6世紀半ば前後] →將軍山(墳長90m) [6世紀第3四半期～7世紀初頭] ・鉄砲山(墳長109m) [6世紀後半～7世紀初頭] ということになる。

本稿では、丸墓山古墳を6世紀前半の古い段階を中心とした時期に築造されたと考えておくと、この時期の古墳の埋葬施設は稲荷山古墳と同様の竪穴系埋葬施設と考えるのが常識的であるから、現在の墳頂部の広さから考えるならば、3～5基くらいの多くの埋葬施設が所在していた可能性がある。とすれば、埋葬施設1基あたり10年インターバルとして時間を見積もるならば、最大限50年にも及ぶ期間に亘って埋葬が継続していたとすることもできる。西暦510年あたりが初葬なら、6世紀後半代まで埋葬時期の下限が下降することになり、瓦塚古墳の埋葬継続期間と大幅に重複することを考慮しなくてはならなくなる。3基30年だったとしても西暦510～540年となり、550年を射程に置いた時間帯の中には入ってくるであろう。同様に、稲荷山古墳と二子山古墳、瓦塚古墳と將軍山古墳・鉄砲山古墳の間にも重複期間を考慮する必要があることになる。

ともあれ、埼玉古墳群の古墳築造の動向からは、丸墓山古墳から瓦塚古墳に移行する時期である6世紀前半の新しい段階には古墳の規模の縮小が顕著となり、瓦塚古墳・奥の山古墳から將軍山古墳・鉄砲山古墳に移行する6世紀第3四半期段階には再び大型化するという、複雑な築造事情があることを考慮しなくてはならないようだ。

4 北武蔵地域・南武蔵地域・上野地域の大型古墳の動向

本章では、一旦埼玉古墳群を離れ、北武蔵諸地域、多摩川流域・鶴見川流域を中心とした南武蔵地域、上野地域の大型古墳の動向について考察しておきたい。これらの地域に関する古墳の編年及び歴史的考察は、坂本和俊氏(註19)、滝沢規朗氏(註20)、加部二生氏・橋本博文氏(註21)、若狭徹氏(註22)らの業績があり、かつての和島・甘粕・金井塚氏らの編年・年代論、歴史過程論を書き替えつつあるとすることができる。ここでは、西暦5世紀後半前後から6世紀後半のあたりの時期に限って触れておきたい。古墳の内容や築造時期については『集成』東北・関東編における武蔵・上野各地域の記述を中心として、それ以後の個々の論文・報告等を参考に述べることにする。

なお、この章では便宜上『集成』における古墳編年であるいわゆる「共通編年」と和田晴吾氏の古墳編年(註23)を使用することになるが、それぞれ「共通編年」「和田編年」と特記しておく。共通編年では7・8期が5世紀後半、9期が6世紀前半、10期が6世紀後半にあたり、和田編年では8・9期が5世紀後半、10期が6世紀前半、11期が6世紀後半におおむね対応する。

まず、児玉郡地域を考える。4～5世紀に中型円墳が数か所に散在していたこの地域には共通編年

	児玉郡周辺	北 武 蔵			南 武 蔵		
		行田市周辺	東松山市周辺	坂戸・川越市周辺	北足立郡域	多摩川下流域	多摩川中流域
1期	↑ 越前4号墓■25 鷺山■60		山の根■54.8 塩3号■?28				
2期			諏訪山29号■50 塩1号■35 塩2号■29 天神山■57 諏訪山■61		塚本塚山■35+		
3期	物見塚○47 前山1号○35					宝来山●100	
4期	長坂聖天塚○50 前山2号○		A案 將軍塚●115+ 雷電山●84	三変稲荷神社□25	熊野神社○38 高稲荷●75 江川山○	亀甲山●104 新居里●72	砧中学校7号■65
5期	川輪聖天塚○38 金鑽神社○67					野毛大塚○82 尾山八幡塚○35	砧中学校4号○30 白井塚○36
6期	公卿塚○65 生野山將軍塚○60 志戸川○40				殿山○32	天慶塚○30	狛江経塚○35
7期	生野山9号○44 長沖14号○39 美里諏訪山●39	とやま●69 稲荷山●120 横塚山●38+	諏訪山33号○33		白銀塚山○25	御岳山○40 尾山孤塚○30	狛江東塚○35
8期	千光寺●29	錯塚●45.5 女塚●45.5 二子山●138	弁天塚●37 おくま山●62	どうまん塚○25 坂戸105号●40		庵谷●54	狛江亀塚●40 狛江兜塚○38
FA9期	生野山銚子塚●58 生野山16号●58	丸墓山○102 永明寺●78 愛宕山●53 瓦塚●75	冑山古墳○92	西原●33	一夜塚○50 柘塚●60	多摩川台2号●38	東稲荷塚○34
FP10期	白岩銚子塚●46 中新里諏訪山●42 秋山諏訪山●60 大仏二子塚●45 四十坂寅稲荷●54 小島二子塚●60 御手長山●50	鉄砲山●109 奥の山●70 將軍山●95 栢間天王山塚●107 真名板高山●104 中の山●79 小見真観寺●112	秋葉山●45.5 長塚●33 伊勢山●41 とうかん山●74 野原●35 B案 將軍塚●115+ 大塚1号●46	雷電塚●47 胴山●60 塚原3号●32 塚原1号●40 塚原2号●45 南大塚4号●36 牛塚●47	ひさご塚●41 三島神社●50	● 前方後円墳 ○ 円墳 ■ 前方後方墳 □ 方墳	飯田塚○30

第3図 武蔵全域の大型古墳編年図（坂本和俊氏による）

7期末～8期初頭に帆立貝型古墳の美里諏訪山古墳（墳長39m）が築造される。それ以後には、本庄市・児玉町・美里町の境界の独立丘陵である生野山丘陵上に生野山銚子塚古墳（墳長58m）・生野山16号墳（墳長58m）の2基の中型前方後円墳が共通編年9期に相次いで築造されたと考えられている。生野山古墳群の中では、共通編年6期の生野山將軍塚古墳（径60m）、7期の生野山9号墳（径44m）の2基の中型円墳があり、一定の首長墓系列を形成していると考えられる。神川町域では共通編年9期に白岩銚子塚古墳（墳長46m）、9期から10期にかけて中新里諏訪山古墳（墳長42m）が築造される。やや小さめの中型前方後円墳であり、所在地から同じ勢力の築造した古墳とは考えない方がよいかもしれない。児玉町領域にはあまり大きな前方後円墳が目立たず、長沖古墳群中の墳長30mクラスの前方後円墳を除くと、共通編年10期築造と考えられる秋山諏訪山古墳（墳長60m）のみである。美里町域には、美里諏訪山古墳からやや時期のへだたりがあるが、大仏二子塚古墳（墳長45m）が共通編年10期の築造を想定されている。本庄市域は、古墳時代前期から中期にかけて径40～60mクラスの中型円墳・方墳が築造される地域であったが、共通編年10期に至って小島二子塚古墳（墳長60m）が築造される。

本庄市に隣接する大里郡岡部町域には、共通編年10期に属すると思われる帆立貝型古墳の四十坂寅稲荷古墳（墳長54m）・お手長山古墳（墳長60m）が造られ、その後、内出八幡塚古墳（円墳、

径33m)・前原愛宕山古墳(方墳、一辺37m)が7世紀前半代に築造されるという一列の首長墓群がある。

児玉地域では特別に傑出した首長墓群がなく、共通編年9～10期に各地に墳長60mクラスまたはそれに近い規模の首長墓が単独に近い状態で形成される。岡部町域は6世紀後半以降というかなり新しい段階に首長墓系列が形成されるが、あまり強い勢力と評価することはできない。

その他の大里地域では、小型前方後円墳がいくつか存在する。たとえば、熊谷市西部にはB種ヨコハケの円筒埴輪片を出土して共通編年8期に相当すると考えられる前方後円墳の横塚山古墳(墳長38m以上)がある。埼玉古墳群の所在する行田市域に近い熊谷市北部の中条には、まだ古墳群の実態が十分明らかではないが、帆立貝型古墳がやや多く存在していたことがわかりつつある。鎧塚古墳(墳長44m)は2か所の墓前祭祀跡がTK 208～23型式相当の須恵器高坏形器台を中心としたものなので5世紀後半～末頃の共通編年8期の古墳である。ほとんど隣接区域にあった女塚1号墳(墳長46m)はヨコハケを残す円筒埴輪を含んだ多量の円筒埴輪・形象埴輪を出土しており、やはり8期の古墳として評価されている。南河原村域にも、B種ヨコハケの円筒埴輪片を出土したとやま古墳(墳長69m)が7期の古墳と考えられている。この4基の古墳はむしろ行田市周辺地域にあるものとして位置付けられる。年代の関係としてはむしろ稲荷山古墳に先行するか同時期と考えてよいであろう。

埼玉古墳群以外の古墳としては行田市周辺で取り上げられるものがどのくらいあるのであろうか。行田市の北東に隣接する羽生市域には大型前方後円墳がいくつか存在する。羽生古墳群の毘沙門山古墳(墳長63m)があるが、横穴式石室の巨石が知られていることから共通編年10期相当と考えてよかろう。東の利根川近くの村君古墳群には永明寺古墳(墳長78m)がある。甲冑・鉄鎌・馬具などから6世紀前半あたり、共通編年9期の古墳とされている。さらにやや下流の加須市域の大越古墳群・樋遣川古墳群にはあまり傑出した古墳がなく、鶴ヶ塚古墳(径30m)、御室神社古墳(径40m)、宮西塚古墳が有力視できるものであろう。元荒川水系の星川・野通川沿いの埼玉古墳群より下流域になる菖蒲町域には共通編年10期後半の栢間天王山塚古墳(墳長107m)を中心とした栢間古墳群がある。夫婦塚古墳(墳長45m)・東浦古墳(墳長58m)もあるが、細かな時期はわからない。少し上流の位置の小沼耕地1号墳(墳長39m)は帆立貝形古墳であり、やはり10期に属する。行田市より南の吹上町域にも中規模な古墳がいくつかある。三島神社古墳は60mクラスの前円後円墳と考えられ、共通編年10期の古墳であろうが、細かな内容は不明である。

もう少し埼玉古墳群に近い地域にも大型古墳が多い。埼玉より東に少し離れた行田市真名板には、関東造盆地運動のために3m埋没しているため正確な墳長がわからないが、墳長120m以上はあるだろうと考えられている真名板高山古墳がある。共通編年10期の古墳であろう。埼玉より北に離れた区域の行田市小見には小見真観寺古墳(墳長107m)がある。方頭大刀・頭椎大刀・銅鏡からは共通10期でもやや新しい段階に属する。この古墳の近傍には虚空蔵山古墳(墳長40～50m?)という10期の前方後円墳があるが、前方部しか存在せず、正確な規模は不明である。埼玉將軍山古墳からわずか500m程東には若王子古墳(墳長95m)があった。この古墳も共通編年10期(新)段階であろう。埼玉古墳群のすぐ北東側の隣接台地上には若小玉古墳群があり、9～10期に相当する

三方塚古墳（墳長58m）という前方後円墳の所在が判明している。それ以外に愛宕山古墳・荒神山古墳という2基の前方後円墳の所在伝承がある。7世紀前半～中葉段階に下る若小玉八幡山古墳（円墳、径80m）・地蔵塚古墳（方墳、一辺25m）のあたりの時期の方がより有力になる古墳群と考えるべきではなかろうか。

行田市周辺とは荒川本流を隔てて西側になる、比企地域を見ておこう。この地域では、児玉地域と同様に前期古墳の卓越が著しいが、それと対照的に5世紀段階にはほとんど有力な古墳が見当たらない。東松山市域で最大の前方後円墳である野本將軍塚古墳（墳長115m以上）の位置付けが最大の問題となる。前方部の墳丘下に弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡らしい遺構の断面が観察されたことがあるため、金井塚氏の指摘（註24）のような5世紀後半～6世紀前半の古墳と考えるよりは4世紀後半～5世紀前半と考えるべきであろう。なお、坂本和俊氏は共通編年4～5期説と10期説を紹介するが、基本的には古いと認識しているようである（註25）。それ以外の古墳を以下に触れていく。共通編年7期には、高坂台地の諏訪山古墳群内の諏訪山33号墳（径33m）が築造される。中規模の円墳であるが、短甲を出土し、首長墓の一群として考えうるといふ。8期には、北比企丘陵の三千塚古墳群中に弁天塚古墳（墳長37m）、松山台地におくま山古墳（墳長62m）の2基の帆立貝形古墳が築造される。9期には冑山古墳（径92m）のような大型円墳、9～10期には三千塚古墳群に秋葉塚古墳（墳長38m）・長塚古墳（墳長33m）、冑山古墳の近傍にとうかん山古墳（墳長74m）が築造され、首長墓系列が形成される。さらに10期には江南町野原古墳（墳長35m）、熊谷市伊勢山古墳（墳長41m）、大里町大塚1号墳（墳長37m）がある。この地域においても、冑山古墳→とうかん山古墳の系列以外は見ると見るべきものがない。

埼玉県南部・西部にあたる北足立・入間地域ではどうであろうか。北足立地域では、共通編年7期前後にさいたま市域南部の白鍬古墳群に径20～30m代の中規模の円墳が数基あるようであるが、ここには今のところ前方後円墳は確認されていない。朝霞市域には共通編年8期末頃の大型円墳である一夜塚古墳（径50m）、9期の古い段階と考えられる前方後円墳の柵塚古墳（墳長60m）がある。桶川市域には10期に属する川田谷ひさご塚古墳（墳長41m）がある。ここでも傑出した大型古墳は限られている。

入間では、坂戸市域に中規模前方後円墳の系列が認められる。共通編年8期後半の入西石塚古墳（坂戸105号墳、墳長40m）が古く、9期後半の雷電塚古墳（墳長47m）、10期の胴山古墳（墳長63m）という一群は埼玉県南部としては最も有力な勢力であろう。この近傍では勝呂神社古墳（径55m）、浅羽野1号墳（土屋神社古墳、径50m）、成願寺2号墳（径50m）のような大型円墳もあるが、いずれも神社の社殿が乗っており詳細な調査が行われていない。また、三福寺2号墳（塚の越古墳、墳長30m）は10期前半の小型前方後円墳である。さらに、坂戸市から毛呂山町にかけて分布する塚原・大類（苦林）古墳群には、塚原1号墳（墳長44m）・塚原2号墳（墳長40m）・塚原3号墳（墳長30m）の3基の前方後円墳が共通編年10期に属すると考えられ、大類1号墳（観音塚古墳、墳長24m）は時期不明、大類2号墳（墳長30m）が9期である。

川越市域では、共通編年8期に、鏡・挂甲・馬具等多くの副葬品を出土したどうまん塚古墳（径25m）が中規模円墳ながら首長墓的な古墳である。それ以後、帆立貝形古墳の西原古墳（墳長33m）

が9期、前方後円墳の牛塚古墳（墳長47m）が10期末頃とされているが、時期不詳の大型古墳が仙波古墳群内に多く存在する。特に、慈眼堂古墳（墳長53m）は大きいため前方後円墳と考えられており、愛宕山古墳（径45m）・浅間山古墳（径38m）もやや規模の大きな円墳である。10期には南大塚古墳群にも4号墳（墳長36m）のような中型前方後円墳もある。

南武蔵地域を考えてみよう。多摩川下流域から触れることにする。近年の調査により、数々の事実が明らかになりつつある大田区多摩川台古墳群とその周辺では、多摩川台1号墳と2号墳が横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳（墳長38m）であったことが周堀の調査で明らかになった。周堀から須恵器蓋8坏・甕・高坏・長頸壺・甕・提瓶・横瓶、土師器坏等が出土しており、MT85～TK43型式に属するとされている。蓋坏に新しい要素が認められることから、TK43型式（新）段階と考えられており、「570～590年頃」と見積もられている（註26）。しかし、『集成』東北・関東編の今井堯氏はこの古墳を共通編年9期としている。この須恵器の時期を追葬期と見ているようである。滝沢規朗氏も同様に和田編年10期に位置付けている。小稿ではこの見解に従っておく。

また、中流域に位置する世田谷区野毛大塚古墳も調査の結果墳長82mの帆立貝式古墳であることがわかった。埋葬施設の近傍に供献土器と思われる粗製の土師器高坏が出土しているが、和泉式に相当するものであり、多量の石製模造品・短甲等の出土品も持ち、5世紀前半～中葉くらいの時期と考えられるようになった（註27）。

これら以外の古墳も含めて、概観してみよう。古墳時代前期～中期前半については多摩川台古墳群に首長墓系列がたどれるが、野毛大塚古墳以降世田谷区野毛古墳群に移動するようである。和田編年7期（共通編年6期）に天慶塚古墳（径40m）、8期（共通編年7期）に御岳山古墳（径42m）、9期に尾上狐塚古墳（径30m）と、やや規模の大きい円墳の系列が続く。和田編年9期（共通編年8期）に多摩川台で前方後円墳が復活し、庵谷古墳（墳長54m）・浅間神社古墳（墳長60m）が築造される。それに続いて、10期（共通編年9期）に多摩川台2号墳（旧1・2号墳、墳長38m）、11期（共通編年10期）に観音塚古墳（墳長43m）という形で中規模前方後円墳として首長墓系列を維持している。多摩川中流域の狛江市域付近では和田編年8期に東塚古墳（円墳、径35m）、9期（共通編年8期）に狛江亀塚古墳（帆立貝形古墳、墳長40m）・狛江兜塚古墳（円墳、径38m）、共通編年9期に東稲荷塚古墳（円墳、径34m）・慶元寺1号墳（円墳、径30m）、共通編年10期に飯田塚古墳（円墳、径30m）という30～40mクラスの中規模古墳による首長墓系列が維持されている。都内の他地域では、港区芝丸山古墳（墳長106m）は一時後期初頭と言われていたが、最近では前期古墳と考えられている。上野台地上の台東区摺鉢山古墳（墳長70m）は周囲に数基の古墳群を形成していると言われ、円筒埴輪の出土が確認されていることから共通編年8～10期とされる。文京区富士神社古墳（墳長45m）も同様である。東京都域は規模の縮小傾向があるものの、首長墓系列が維持されている、と考えてよいだろう。

神奈川県域を見てみよう。前期段階に白山古墳（墳長87m）・観音松古墳（墳長72m）という大型古墳を築造していた川崎市域の日吉・加瀬古墳群とその周辺の地域では和田編年8期に日吉矢上古墳（円墳、径24m）、同9期に西福寺古墳（径30m）、10～11期に規模不明の前方後円墳である、駒岡山古墳・諏訪坂古墳があるのみで、前期に比較すると著しく弱体化している。横浜市域で

時期	東京湾北西部			荏原台		砧・狛江			日吉・加瀬				谷本川				大岡川			
	丸山	掃鉢山	富士	田圃調布	野毛	砧	狛江	喜多見	加瀬	日吉	西福寺	カネ塚	諏訪坂	稻荷前	虚空蔵山	朝光寺原	三保杉沢	殿ヶ谷	軽井沢	瀬戸ヶ谷
2									白山(87)					1号(37)						
3									観音松(72)					16号(32)						
4	丸山(106)				宝来山(100)									6号(46)						3号(40)
5					亀甲山(110)			砧7号(67)			カネ塚(30)				虚空蔵山(35)					
6					西岡31号(30)			野毛大塚(80)	砧4号(57)				了源寺(30)							
7					天康塚(40)															
8					御岳山(42)			東塚(30)			日吉天上(24)					1号(37)				
9					浅間神社(60)			狐塚(40)			亀塚(48)		第六天塚(28)							
10		掃鉢山(70)	富士神社(45)		多摩川右2号(37)															瀬戸ヶ谷(41)
11																				三保杉沢(30)
																				軽井沢(30)

第4図 南武蔵の大型古墳編年図（滝沢規朗氏による）

は港北区域の稲荷前古墳群・朝光寺原古墳群とその周辺地域でも後期段階は群集墳や横穴墓群の築造が主となってしまふ。和田編年8期の朝光寺原1号墳（径37m）以降、朝光寺原古墳群は径20m以下の古墳のみになってしまひ、前方後円墳は和田編年11期の三保杉沢古墳（墳長28m）のような小規模なもののみである。また、大岡川流域のグループでは前期段階の殿ヶ谷古墳群の中型前方後円墳の系列を除くと、和田編年10期の瀬戸ヶ谷古墳（墳長41m）・11期の軽井沢古墳（墳長30m）の2基の前方後円墳を指摘できるのみである。

最後に、上野地域に触れる。共通編年7期以降の大型前方後円墳による首長墓系列が認められる小地域は、実に9ないし10地域に達する。したがって、それをこれまでのように記述する紙数はもはやないのでおおよそをまとめる。中期前半に東日本最大規模の天神山古墳を築造した太田市付近の勢力は50mを越えるクラス古墳をほとんど造らなくなる。代わって、蛇川上流域で共通編年7期に太田鶴山古墳（墳長104m）・鳥山亀山古墳（墳長58m）、8期に鳥崇神社古墳（墳長70m）が造られる。蛇川下流域には7期に米沢二ツ山古墳（墳長73m）、9期に東矢島観音山古墳（墳長99m）・割地山古墳（墳長110m）、10期に九合村57号墳（墳長95m）・九合村60号墳（墳長111m）・沢野村105号墳（墳長55m）が造られる。粕川流域の伊勢崎市・赤堀町周辺地域では7期に丸塚山古墳（墳長81m）、9期に上武士天神山古墳（墳長127m）、10期に五目牛二子山古墳（墳長109m）が造られる。荒砥川流域の前橋市東部地域には、8期の今井神社古墳（墳長71m）の後、9期に中二子古墳（墳長108m）・前二子古墳（墳長93m）・後二子古墳（墳長82m）が相

期	西 毛 地 区									東 毛 地 区									
	鍋川流域 (甘楽)	鮎川・神流 川流域(緑 野・多胡)	碓氷川流域 (碓氷)	吾妻川 流域 (吾妻)	榛名山東南麓 (群馬)	井野川流域 (群馬)	馬川流域 (片岡)	広瀬川流域 馬川下流域 (那波)	荒砥川流域 (勢多)	利根川上流域 (利根)	柏川流域 (佐位西部)	早川流域 (佐位東部)	石田川・蛇 川下流域 (新田南部)	蛇川上流域 (新田北部)	蓮川流域 (山田南部)	矢場川流域 (山田東部)	利根川下流域 (邑楽西部)	渡良瀬川 下流域 (邑楽東部)	
1期																			
2期							川井稲荷山●43												
3期	北山茶白山 ■28 北山茶白山 ○20	三本木○? 堀之内CK -2号■31 堀之内DK -4号■?			本郷大塚○45 行幸田山A-1号 □25			前橋天神山●129 軍配山○40 下郷10号■42 下郷天神塚●102											
4期	恩行寺裏山 ○40	神田○?					下滝御伊勢 山○40 柴崎蟹沢 ○?	浅間山●172 大鶴巻●123 長者屋敷天 王山●65 大山○60	文珠山○50 山王大塚○44 箱石 朝倉2 □33号○20										
5期	神明塚●75	十二天塚北 □23 十二天塚 □37×27 白石稲荷山 ●140					下佐野茶白 山○58												
6期																			
7期																			
8期																			
9期																			
10期																			
10期以降																			

●前方後円墳 ■前方後方墳 ○円墳 □方墳 *墳形不明

第5図 上野地域の大型古墳編年図 (加部二生・橋本博文氏による)

次いで築造されるが、10期には急速に規模縮小する。前期に100m級の古墳を3世代に亘って築造した広瀬川流域では、8期に広瀬鶴巻塚古墳（墳長86m）で前方後円墳が復活し、10期に前橋二子山古墳（墳長104m）・大屋敷古墳（墳長103m）・上両家二子山古墳（墳長90m）が継続する。7期に岩鼻二子山古墳（墳長115m）を築く井野川流域では、8期に不動山古墳（墳長94m）、10期に綿貫観音山古墳（墳長90m）がある。8期に井出二子山（墳長108m）・保渡田八幡山（墳長102m）・保渡田薬師塚（墳長105m）の保渡田三古墳が築造される榛名山東南麓地域は9期に王山古墳（墳長72m）、10期以降に総社二子山古墳（墳長90m）以下の総社古墳群が形成される。碓氷川流域の高崎市西部・安中市域では、8期に上並榎稻荷山古墳（墳長122m）・平塚古墳（墳長105m）、9期に梁瀬二子塚古墳（墳長78m）、10期に八幡観音塚古墳（墳長96m）が造られる。中期に白石稻荷山古墳（墳長140m）を築造する藤岡市域では8期ないし9期に七輿山古墳（墳長146m）、9期に戸塚神社古墳（墳長64m）、10期に白石二子山古墳（墳長66m）・諏訪神社古墳（墳長52m）を築造する。他にも3か所で10期のみ首長墓系列が見られる。

上野地域では共通編年8期と9期の境に大きな画期があり、10期とそれ以降の間にも画期がある。すなわち、西暦500年前後と西暦600年前後が画期である。

5 「武蔵国造」の乱の時期の政治勢力の動向について

前章の分析を経て、ここでは武蔵から上野にかけての各地の大型古墳の築造の推移から考えられる政治的状況・動向を具体的にいくつか指摘しておこう。

これまでの行論で明らかになったのは、大型古墳築造の動向から見る限り北武蔵・南武蔵・上野のすべての地域で画期となるのは、共通編年8期と9期の境、つまり5世紀末葉から6世紀初頭頃、および10期とそれ以後の境、6世紀末葉から7世紀初頭頃であり、細部で見れば多少年代の前後する場合もある、ということである。大型前方後円墳が最大規模になるのは、埼玉古墳群では共通編年9期前半、6世紀以降の上野でも共通編年9期初頭頃、同じく5世紀後半以降の南武蔵では8期である。この画期において武蔵地域・上野地域双方ともそれなりの政治勢力の動揺や退転・交替、つまり首長墓系列としての大型古墳群の築造停止・断絶現象が見てとれるが、6世紀前半から中葉の時期、つまり共通編年9期後半にはあまり大きな変動がない、ということである。

これらの動向を『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月是月条に記されている事件に沿って理解できようか。いわゆる「武蔵国造の乱」では、小杵が殺されることになっている。大型古墳が寿陵の原則にもとづいて築造されているとして、小杵本人の墓は大型前方後円墳であったかもしれないが、首長本人を失い、国造職への就任の途を断たれた一族は、その後急速に勢力を失うことになるであろう。とすれば、一連の古墳が築かれた場所で、小杵の後裔首長層が被葬者集団となる古墳群は、その次の世代、つまり6世紀後半代のやや古い段階以降に築かれた古墳が中小規模に転落していなければならない。しかし、埼玉古墳群においては、この段階に築造された可能性の高い古墳である鉄砲山古墳・將軍山古墳のいずれも、90～100mクラスの規模を維持しており、古墳群内で、小杵以降の首長層を想定することは無理がある。唯一、坂本和俊氏のように埼玉古墳群内の細かな古墳の規模の変転をそのまま笠原直使主と同族小杵に対応させるという解釈のみにより可能に

なるとはいえるが、これはむしろ特定首長墓系列の古墳群における家族や同族の関係をより複雑に考えることになり、無理な解釈と言わざるをえない。従来どおりの解釈にもとづいて、多摩川流域で考えるにしても、共通編年9期の多摩川台2号墳より、その後の時期の観音塚古墳の方がかえって規模を大きくしており、これも小杵以降の首長層と想定することはできない。虚心に考えれば、この条件に該当する古墳や古墳群は武蔵地域のどこにも見当たらないことになる。考古学的に見る限り、「武蔵国造の乱」は虚構である、と考えざるをえない。

6 おわりに

本稿はあくまでも考古学的に「武蔵国造の乱」を考えてみたものである。大型古墳の動向から見た武蔵地域と上野地域の古墳時代政治勢力のありようからは、6世紀前半の時期に「武蔵国造の乱」を想定できるような大規模な政治的変動は見いだすことができず、むしろ5世紀末葉から6世紀初頭頃、および6世紀末葉から7世紀初頭頃の2時期に関東全域あるいは全国規模といってもよい大変動があったことを想定することができる。

大型古墳築造の動向が古代史上の事実の反映があると考えらるならば、今後は「武蔵国造の乱」自体が史実であるというよりは虚構に近いものとして取り扱わざるをえないのではなからうか。そして、実際には本稿で明らかにした2時期の変動期に日本古代の国政史上の画期を求めるべきであろうが、どういう制度の創設や退転に関わるかは検討を要する。別稿を期したいと思う。

註

- (1) 尾野善裕 1998 「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『第6回東海考古学フォーラム岐阜大会 土器・墓が語る 美濃の独自性～弥生から古墳へ～』 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会 所収
尾野善裕 2001 「中・後期古墳時代暦年代再論—いわゆる〈武蔵国造の乱〉をめぐる—」『久保和士君追悼考古論文集』 久保和士君追悼考古論文集刊行会 所収
- (2) 清水久男 1994 「『武蔵国造の乱』への招待」『武蔵国造の乱』（特別展図録） 大田区立郷土博物館 所収
- (3) 和島誠一・甘粕 健 1958 「武蔵の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』第1巻 所収
和島誠一 1962 「古墳文化の変質」『岩波講座日本歴史2 古代2』（旧版） 岩波書店 所収
- (4) 甘粕 健 1970 「武蔵国造の反乱」『古代の日本 7 関東』（旧版） 角川書店 所収
- (5) 大塚初重 1970 「東国古墳の成立」『古代の日本 7 関東』（旧版） 角川書店 所収
- (6) 金井塚良一 1979 「野本將軍塚古墳の謎—武蔵国造の争乱と北武蔵最大の前方後円墳の築造時期—」『歴史読本』5月号 新人物往来社 所収
- (7) 滝沢規朗 1992 「武蔵における首長墓の変遷」『東京考古』10 東京考古談話会
- (8) 坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』6 群馬土器観会
- (9) 利根川章彦 2002 「稲荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』第15号 埼玉県立さきたま資料館

- (10) 若松良一 1992 『埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 二子山古墳・瓦塚古墳』 埼玉県教育委員会
- (11) 田中正夫 1989 「史跡埼玉古墳群保存修理報告 丸墓山古墳保存修理事業の報告」『調査研究報告』第2号 埼玉県立さきたま資料館
- (12) 若松良一(註10) 文献
杉崎茂樹 1986 『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集 瓦塚古墳』 埼玉県教育委員会
若松良一他 1989 『埼玉古墳群発掘調査報告書第7集 奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』 埼玉県教育委員会
- (13) 若松良一 1990 「瓦塚古墳の調査から 造り出し出土の供献土器について」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館
- (14) 杉崎茂樹 1985 『埼玉古墳群発掘調査報告書第2集 鉄砲山古墳』 埼玉県教育委員会
- (15) 岡本健一 1997 『將軍山古墳』 埼玉県教育委員会
- (16) 岡本健一 1997 「V 確認調査のまとめ 5 土器」『將軍山古墳』 埼玉県教育委員会 所収
- (17) 中村 浩 1980 『陶邑I』 大阪府教育委員会
中村 浩 2000 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』 芙蓉書房
- (18) 杉崎茂樹 1988 『埼玉古墳群発掘調査報告書第6集 丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳』 埼玉県教育委員会
- (19) 坂本和俊 1996 「武蔵の前方後円墳」『第1回東北・関東前方後円墳研究会 東北・関東における前方後円墳の編年と画期 発表要旨資料』 東北・関東前方後円墳研究会
- (20) 滝沢規朗(註7) 文献
- (21) 加部二生・橋本博文 1996 「上野の前方後円墳」『第1回東北・関東前方後円墳研究会 東北・関東における前方後円墳の編年と画期 発表要旨資料』 東北・関東前方後円墳研究会
- (22) 若狭 徹 2002 「古墳時代の地域経営ー上毛野クルマ地域の3～5世紀ー」『考古学研究』第49巻 第2号(通巻194号) 考古学研究会
- (23) 和田晴吾 1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号(通巻134号) 考古学研究会
- (24) 金井塚良一(註6) 文献
- (25) 坂本和俊(註8)(註19) 文献
- (26) 野本孝明 1993 「多摩川下流域左岸の後期首長墓の変遷について」『多摩川台古墳群発掘調査報告書Ⅱー第1・2・7・8・9号墳の範囲確認調査ー』 大田区教育委員会
- (27) 寺田良喜他 1999 『野毛大塚古墳』 世田谷区教育委員会 野毛大塚古墳調査会